

# 仏師長勢——円派仏師研究（一）——

はじめに（長勢と円派仏師）

仏師定朝の系譜を引くいわゆる正系三派仏師の内、定朝高弟長勢以後の名前に円字を伴なう一流を、今一般に円派、円派仏師と呼んでいる。正確に言えば、円字を伴なうようになるのは長勢弟子の円勢以降であるが、円勢は長勢の勢の字を継ぎ、また長勢の系譜を継いだのは円勢一流のみであるので、遡って長勢を円派の祖としうる。この一流は、かつては、その仏所（工房）が三条にあったことから三条仏所と称されて一般的であったが、それがいつの頃からか円派仏師と呼ばれるようになった。

幕末の黒川春村『歴代大仏師譜』<sup>1</sup>では、「三条一流祖」として「法印長勢」をあげている。『本朝大仏師正統系図并末流』（『美術研究』本）等諸本知られている仏師系図には、いわゆる七条仏所を正統とするため長勢以降の三条仏所の仏師は取り上げられないことが多い。円派の呼称の始まりははっきりしないが、戦前の小林剛や野間清六による仏師研究の中で用いられるようになったようである。円派仏師研究の嚆矢と云うべき昭和九年の谷信一の論文「円勢法印考」<sup>2</sup>ではまだ「三条仏所」と出るが、呼称の根拠がはっきりしないとして疑問を呈している。昭和二十

武笠 朗

五年の小林剛の「仏所の分立とその名称について」<sup>3</sup>では、昭和八年に奈良室博物館で行なわれた鎌倉彫刻展を回顧して、仏所の名称に疑問が生じ、「止むを得ず慶派仏所とか院派仏所とか円派仏所と云う様な特別な名称でその場を糊塗した」とあり、その始まりが示唆される。これに促されて、同展覧会の図録である『鎌倉彫刻図録』<sup>4</sup>を見ると、所収の野間清六の論文「鎌倉期初頭に於ける仏師の消長関係」に、「京都派の院流、円派、奈良派の慶派の三派が分立」<sup>5</sup>などとして、円派、院派、慶派仏師、三派仏師の語が用いられている。さらに「定朝の没後は長勢派（後に云ふ円派）が勢力を得たが、やがて大宮仏所の院派がこれに代って長大となり、鎌倉期になると南都仏師の慶派が台頭するに至った」と、ほぼ今の認識と同じ仏師の消長が語られている。同書所収の小林剛や金森遵の論文<sup>6</sup>では、ともに一度だけ円派、院派の語が使われるものの、ほぼ仏所の語で終始しているので、野間論文がその最初期の使用例かと思われる。三条仏所、転じて円派仏師の祖は『歴代大仏師譜』以来法印長勢と認識されてきた。

仏師長勢の研究は、小林剛の「仏師法印長勢」<sup>7</sup>が、いわば決定版として長く基本文献とされてきた。その重要性は刊行後七十年近く経った今も変わりはなく敬意を表するものだが、円派仏師とその遺品の研究を行

なつてきた身として、円派の祖という文脈で長勢の事績を読み直してみたいと考える。新たな事績の指摘はそれほどないが、これまでの平安後期彫刻史研究、仏師研究の成果を踏まえて事績個々を検討する。史料の読み直しを通じて、特に願主や願意等造像背景を可能な限り推定し、仏師長勢の造像環境を明らかにしてみたい。さらに長勢の事績を検討する中で、十一世紀後半期彫刻史のさまざまな問題に言及してみたい。

## 一、出自と経歴

長勢を語る際にまず触れるべきは、やはり『初例抄』の記事であろう。木仏師として初めて法印に任じられたとして採り上げられる。全文を掲載する。

「木仏師任法印例。長勢。治安元年十月十八日叙法橋。法成寺造仏賞。定朝法眼弟子。延久二十二月廿六日転法眼。円宗寺金堂御造立賞。承暦元年十二月十八日転法印。法勝寺講堂阿弥陀堂造仏賞。寛治五年十一月九日死去。(八十二)。」

これによつてまず彼の没年月日及び没年令を知ることができる。寛治五年(一〇九二)十一月九日に八十二歳で没したという。八十二歳とは長寿で、院尊の七十九歳を超え、八十四歳まで生きた湛慶に匹敵する。没年令から逆算するとその生年は寛弘七年(一〇一〇)となる。寛弘七年といえば、康尚の活動期で、師定朝はこの十年後の寛仁四年(一〇二〇)に無量寿院造像で初出する。定朝のデビューを仮に二十歳とすれば、長勢との年令差は十歳ほどとなる。定朝の弟子というよりも、まずは康尚の工房に属し、定朝が後継した後にその元に入ったとみるべきであらうか。

長勢の出自について『初例抄』は「定朝法眼弟子」とする。『二中歴』は「定朝弟子」<sup>10</sup>、後述する『養和元年記』は「定朝小仏師」としており、諸書が伝えるように定朝の弟子、定朝工房の小仏師であったものとみられる。

定朝の弟子は、その息覚助と長勢が知られている。それ以外ははっきりしないが、万寿三年(一〇二六)十月の後一条帝中宮威子御産御祈の御仏二十七体の造像では、定朝の下に大仏師二十人、小仏師一〇五人が従事しており(『左経記』)、多くの弟子仏師等がいたことは明らかである。その一部の名を伝えてくれるのが、伊東史朗氏の紹介された曼殊院本『不動雑記』である。<sup>11</sup> 同記巻第三奥書に、「仏師、勢忍、典登、定回、観縁、男行近許也、皆是定朝弟子、式左男」と出る。<sup>12</sup> 伊東氏によれば「前後の脈絡が不明ながら」とあるが、この前に出る「件像」に関わった仏師とみられる。この「件像」(不動明王か)は「高陽院殿東对上御仏」で、造立時に「阿波前司頼成」が行事を勤めたという。高陽院はいうまでもなく藤原頼通が治安元年(一〇二二)に造営した邸宅で、その東対の仏であったといい、頼通関係の造像ということとなる。阿波前司頼成は、治安三年十月から万寿二年(一〇二五)正月の間に阿波守在任とみられる藤原(源)頼成(『小右記』等)<sup>13</sup>かと思われる。造像年代は、前司とあるので万寿二年以後で、頼成は長元四年(一〇三一)同五年に因幡守であったので(『小右記』)、その間の造像かと一応推定される。西暦一〇三〇年頃のこととすると、定朝は三十歳前後、父康尚は既になく、法成寺造営が終了しさらに藤原道長も没して、大規模造像の空白期であったが、頼通関係の造像を請負いそれを弟子に行なわせていたということか。長勢はこの頃二十歳前後、まだこうした造像に関わる立場になかったのだろう。ただ仏師勢忍は勢の字を伴なう。何らかの関係

があつたのだろうか、興味深いところである。

次に彼が紀伊講師であつたらしいことに触れておこう。時代が下がって治承兵火後の興福寺復興に関わる『養和元年記』<sup>14</sup>の記載である。養和元年（一一八一）七月八日の諸堂御仏造始の記事で、「金堂大仏師法眼明円」の割注として、長勢について「定朝小仏師紀伊講師是也」とする。仏師の講師職については、西川新次氏がそれ以前の仏師研究を踏まえて論じられている。<sup>15</sup>それによると講師仏師とは、三派仏師に準ずる仏師で、三派仏師配下の中間仏師層か、三派仏師以外の中小工房の統領的仏師か、ということになる。その後筆者も検討を加え、<sup>16</sup>三派仏師の中でも正系以外の弟子筋（傍系）仏師が、講師職を僧綱補任への足掛かりとした可能性を指摘した。長勢はおそらく、法橋になる前に、何らかの定朝主宰下の造像の功績で紀伊講師に任ぜられていたのであろう。それがあつたので、覚助に先んじて法橋位を得ることが叶つたのではなかったか。

## 二、事績

長勢の造像事績は次の通りである。以下これを検討していく。

康平七年（一〇六四）広隆寺日光月光菩薩像、十二神将像造立。

治暦元年（一〇六五）法成寺金堂造像。叙法橋。

治暦三年（一〇六七）興福寺再興造像？。

延久二年（一〇七〇）円宗寺金堂造像。叙法眼。

この頃か 醍醐中院（往生院）造像。

承暦元年（一〇七七）法勝寺阿弥陀堂造像。叙法印。

永保三年（一〇八三）法勝寺御塔造像。長勢賞讃、円勢叙法橋。

応徳二年（一一八五）法勝寺新堂（常行堂）造像。

同年 中宮賢子追悼丈六阿弥陀造像。

承暦三年（一一八〇）～寛治三年（一一八九）の間 宇治法定院造像。

## 法成寺の復興造像

藤原道長の法成寺は、寛仁四年（一一二〇）供養の九体阿弥陀堂無量寿院をはじめとして、治安二年（一一二二）の金堂・五大堂、万寿元年（一一二四）の薬師堂、同四年の釈迦堂、五重塔等多くの堂塔で構成された巨大寺院であつた。道長晩年の信仰心の高揚と、道長の周りに集積した巨大な富とが結び付いて成立した、きわめて私的な道長家の氏寺であつた。その造像に当たつた仏師は、無量寿院が康尚と定朝、金堂と薬師堂が定朝であり、その他の堂塔の造像も定朝が携つたのではないかとみられている。道長没後も後継の頼通や娘の上東門院彰子によって講堂、東北院が加えられており、その造像も、道長と頼通との関係から在世中の定朝が関与した可能性が考えられる。<sup>17</sup>その造像活動の最初から最後まで法成寺と関わつたとみられる定朝は、天喜五年（一一五七）八月一日に亡くなつた。その翌年の同六年（一一五八）二月二十三日に法成寺はほぼ全焼した。「凡丈六仏像数十余躰。等身金色仏菩薩像百余躰。一時為煙」（『扶桑略記』）という惨状であつた。父道長渾身の法成寺を失なつた嫡男頼通にとって、その復興は何を置いても果たすべき急務であつたにちがいない。また亡くなつたばかりの定朝の多くの遺作が一夜にして灰燼に帰したのであつた。後継の覚助や高弟長勢にとって、おそらく自らもその造像に携わつたであろう範とすべき師の遺作の復興は、同じように果たすべき急務であつたものと思われる。

法成寺復興造像の意義は大きい。南都の治承兵火後の復興造像と異な



り、これはいわば負の意義ではあるが。これについてはすでに簡単に触れたことがある。<sup>18</sup>願主頼通の復興に当たったのスタンスは、道長造営の旧態に復することであり、また定朝後継仏師の復興造像に当たったのコンセプトも、同様に旧様に倣って復することであったにちがいない。師の没のあまりに直後であった。遺作の復興を通じて師の表現を学び直すことになったと思われる。定朝の造像が範と仰がれ、定朝以後の造像が守旧的にならざるを得なかった事情がまずここにある。

長勢はこの法成寺復興造像において、治暦元年（一〇六五）十月十八日供養の金堂の造像に当たり、造仏賞として法橋に叙された（『三僧記類聚』所収「法勝寺金堂御仏」『僧綱補任』『初例抄』）。<sup>19</sup>時に長勢五十六歳。像は中尊三丈二尺金色大日、二丈金色釈迦薬師文殊弥勒菩薩、彩色九尺梵天帝釈天四天王であった。これは、「元定朝仏也」（『法勝寺金堂御仏』）とされ、創建時像とまったく同じ尊像、法量であった。この日金堂と共に薬師堂が供養され、観音堂（新造堂宇か）も供養されらしい（『扶桑略記』『百鍊抄』）。

法成寺の復興は、焼失の約一ヶ月後の天喜六年三月二十七日に、阿弥陀堂、五大堂、薬師堂の造営から始まった。この内薬師堂を除く二堂がまず竣工し、康平二年（一〇五九）十月十二日、阿弥陀堂無量寿院と五大堂が供養された（『扶桑略記』『定家朝臣記』）。この内阿弥陀堂（無量寿院）は最も重視されていたらしく、諸堂築壇の際、阿弥陀堂分は頼通自らがこれに当たった（『定家朝臣記』）。道長が最初に建立し、これを核に法成寺が成立した事情を思えば、それは当然といえよう。堂は「如旧」建立され、仏は金色丈六阿弥陀九体、一丈観音勢至各一体、彩色四天王であった（『扶桑略記』）。九体阿弥陀の中尊は、上東門院彰子が天喜五年（一〇五七）三月十四日に供養した（『扶桑略記』）法成寺内八角

堂（円堂）の本尊丈六阿弥陀（像は焼失を免れた）が転用された（『扶桑略記』）。いまだ健在でこの日の供養にも列席した上東門院の強い希望であったものだろう。そしてその阿弥陀像はおそらく定朝の最後の造像ではなかったか。<sup>20</sup>復興供養の詳細を伝える『定家朝臣記』によれば、供養日当日に阿弥陀堂御仏を堂に安置し、頼通は仏師覚助を召して御衣を賜り、「右府」（教通）も同じくであった。これによって、覚助の阿弥陀堂造像は確実である。中尊を除く脇仏八軀の造像を担当したものであるう。その後「諸卿殿上人諸大夫」が「次仏師等」を召して御衣を賜った。

これについて、「次仏師」を長勢とみて、もう一方の五大堂造像を長勢が担当したのではないかとする小林剛の推定がある。<sup>21</sup>ただ、『定家朝臣記』の文脈からすると御衣の下賜は阿弥陀堂御仏に関わるものとみられ、また「次仏師」は、頼通・教通からではなく「諸卿殿上人諸大夫」から御衣を賜っているのが、覚助より格下の弟子仏師とみるべきで、これを長勢に当てるのはむしろかしいのではないだろうか。

では五大堂造像は誰が担当したのだろうか。仏師の名は一切出ない。五大堂は「皇后職」の造営で、像は彩色二丈二尺不動と丈六四大尊であった（『扶桑略記』）。皇后職は、頼通の娘寛子（後冷泉帝皇后）である。頼通は供養の際五大堂にて御修法を發願し、大般若經を書写して御仏中に籠めたのは「法性寺例也」という。修法は五壇法で中壇明尊他四人<sup>22</sup>であった（以上『定家朝臣記』）。仏師への御衣下賜が、阿弥陀堂五大堂造像に対するものであったとすれば、二堂とも覚助担当ということになる。とすると「次仏師」は覚助の筆頭弟子で、それが五大堂造像の実質担当であったかと想像できる。頼通、寛子との関係から長勢の可能性もあるが、二堂が一連の供養で、覚助以外に仏師名が出ないとなれば、

あるいはこれも覚助の統括した仕事とみるべきかも知れない。

そもそも、こうした大規模寺院の場合、担当仏師の名が知られない堂宇の方が多いのだが、それは何を意味するのか。僧綱仏師かそれに任じられる仏師でなければ記録には止まらないのか、あるいは名前の出た僧綱仏師が他の堂宇も担当したとみるべきなのか。金堂と共に供養された薬師堂もそうである。薬師堂の造営は焼失直後に始められ、康平元年十月二十七日には阿弥陀堂五大堂と共に立柱上棟が行なわれており、造像も平行して行なわれたと想像されるが、堂供養は大幅に遅れて治暦元年にずれ込んだ。復興像のことは記録に出ないが、万寿元年（一〇二五）創建時の御仏は、丈六七仏薬師、丈六六観音、一丈日光月光、八尺十二神将と知られ（『扶桑略記』）、その旧軌に倣った復興であったのなら、これもきわめて大規模な造像である。その造立仏師の名がまったく記録にあらわれないというのは不審である。長勢の法橋叙位が金堂造仏賞とある以上、金堂造像のみで、薬師堂は別な僧綱位を持たない仏師とみるべきか、あるいは長勢の弟子仏師の造像である可能性を含めて長勢の関与を想定すべきか。五大堂での想定が可能なら後者となる。

法成寺復興造像における長勢と覚助の立場を考えてみたい。先に登場したのは覚助で、法成寺内で最も重要な堂宇である阿弥陀堂無量寿院の造像を担当した。しかしこの際、覚助への勸賞はなく、御衣を賜るに止まった。それに対し長勢は、金堂造像を請け負って、覚助に先んじて法橋位を得た。正嫡の覚助と弟子筋の長勢という両者の定朝後継としての立場の相違を踏まえた時、この処遇の相違をどう解釈するかである。復興造像の分担はどのようなになったのか知る由もないが、おそらく最重要堂宇が金堂ではなく阿弥陀堂であり、その頼通家における重要性と、康尚定朝が造像したという定朝工房における阿弥陀堂の重要性が重なり

合って、その造像は、若年だが正嫡の覚助に委ねられることになったかと推察される。ただ、おそらく若年であったこともあって僧綱叙位は見送られたのだろう。このことは、後述する上臈・下臈の問題も絡んでくる。長勢は覚助よりおそらくかなり年長で、仏師としての活動も長く、その間に紀伊講師職を得、僧綱位を得る有資格者であったのではないか。覚助は長勢に遅れること二年の治暦三年（一〇六七）に興福寺復興造像で法橋に叙される。この法橋としての二年の臈の差がその後の長勢と覚助の立場をほぼ同等ならしめたのではなからうか。ただこの後の法成寺造像は、覚助から院助、院覚へと受け継がれ、いわゆる院派仏師の主要な造像の場となっていく。それはまさに定朝正嫡の仕事場であったためとみられる。<sup>23</sup>長勢の系譜は法成寺から離れていく。

#### 興福寺の復興造像

この法成寺造像における長勢と覚助の立場がうかがえて興味深いのが、興福寺の復興造像である。興福寺は康平三年（一〇六〇）五月四日に火災に罹った。『定家朝臣記』によれば、東西金堂、南円堂、食堂は災を免れたが、（中）金堂、講堂等が焼失したらしい。法成寺を失った頼通に再び降り罹った災難で、頼通の悲嘆如何ばかりかと想像されるが、ともあれ法成寺と同様にその復興は氏長者の責務であった。その再興供養は治暦三年（一〇六七）二月二十五日で、金堂、弥勒浄土院、講堂、東金堂、食堂の堂・仏像が供養された（『扶桑略記』）。『僧綱補任』によれば、覚助が造仏の功により法橋に叙された。覚助の関与は明らかだが、長勢も関わった可能性が考えられる。この復興造像については、後年のいわゆる治承兵火後の同寺復興造像の際に回顧されることがあった。『吉記』治承五年（一一八一）六月二十七日条には、担当仏師を巡

る相論に関して、仏師明円が「康平、仏師長勢覚助等也」としており、長勢の関与をおわせる。さらに明円は、この際覚助は「下臈」であったが興福寺御仏を担当したとし、必ずしも「上臈」の仏師のみが担当になるわけではないとして、結局仏師院尊の金堂、講堂担当を難じているようである。

まず、今まで注目されてこなかったが、長勢の復興造像への関与についてである。「康平、仏師長勢覚助等也」を、康平時の造像は長勢や覚助などが行なったと解すれば、長勢も関わったことになる。しかし康平の時には長勢や覚助などの仏師がいたが、という意味であれば、この後に出てくる仏師成朝の言には覚助の担当することも併せて、長勢関与の可能性は薄らぐ。復興造像の内訳は明らかでないが、金堂、弥勒浄土（金堂内の？）、講堂の像が新造されたとみられる。修造を含めれば諸堂の造像は相当な数に上ったであろう。法成寺の復興が山を越えたとはいえず、興福寺造像も相当な規模である。長勢も関わった可能性は否定できない。

次は「上臈」「下臈」の問題である。明円の言では、覚助を「下臈」とするが、それは長勢を「上臈」としてのこととみられる。「臈」については別稿で触れたことがあるが、<sup>24</sup>仏師の場合も一般の僧と同じく、僧網位の上下とその年数を規準とする序列とみられる。法成寺造像を経てこの興福寺造像時点で、長勢が法橋、覚助は無位であり、長勢を「上臈」、覚助を「下臈」とする明円の認識は正しいとみられる。上臈優位の原則が興福寺の場合当てはまらなかったのはなぜなのか。それは、興福寺と道長・頼通家、そして定朝のつながりに基づく、定朝正嫡としての覚助の立場によるのだろう。

## 円宗寺の造像

延久二年（一〇七〇）十二月二十六日、後三条帝御願円宗寺<sup>25</sup>の金堂、講堂、法華堂が供養された（『扶桑略記』）。長勢は金堂御仏造立賞として法眼に叙された（『初例抄』）。金堂御仏は二丈金色摩訶毘盧遮那如来、丈六金色薬師、同一字金輪、丈六彩色六天で、造始は同年十月という。<sup>26</sup>円宗寺は、いわゆる四円寺と称される天皇の御願寺の一で、いずれも仁和寺の南に寺地を占めた。この講堂にての国家御祈の最勝会と法華会は、天台僧昇進の資格法会、北京三会として重視された。翌延久三年六月二十九日には常行堂、灌頂堂が供養されており（『扶桑略記』）、他三円寺に比べて規模が大きく、白河帝の法勝寺の直接的な先蹤として注目される寺院である。興福寺本『僧綱補任』は治暦四年（一〇六八）のこととして、長勢が「御願寺造仏賞」で法眼に叙されたとする。この年供養の御願寺はないので、『初例抄』の記述と併せて、これが円宗寺を指すものと解釈されるわけだが、『僧綱補任』は長勢に続けて、法橋覚助も「同賞」で法眼に叙されたと伝える。とすると、円宗寺造像には覚助も携わっていたことになる。同日供養は講堂と法華堂だが、法華堂は三尺金銅塔一基のみで、仏像は出てこない。講堂には一丈八尺金色釈迦と丈六金色普賢、文殊、観音、弥勒等像が安置された。覚助は講堂の担当だったのではないだろうか。この円宗寺造像は長勢と覚助が共に携わった。そしてこれによって、覚助は法眼になり長勢に追いついた。上臈下臈の問題は解消されたのであろうか。

願主の後三条天皇（一〇三四～七三）は、頼通家と関係の薄い天皇として治暦四年（一〇六八）に三十五歳で即位した。これで藤原頼通は完全に政界から退き、いわゆる摂関政治は終焉を迎え、後三条帝の親政が行なわれた。この政権の推移は、造仏界にも大きな影響をもたらしたに



相違ない。最大の願主が藤原摂関家から天皇へと移るという大きな変貌であり、仏師たちは対応を迫られたであろう。後三条帝は即位翌年（延久二年）にこの円宗寺造営に至る。後三条帝にとって、直前の頼通の法成寺再興を見据え、摂関家に対抗するような本格的な造像を試みたに違いない。後三条帝は頼通と疎遠であったという。にもかかわらずその造像に長勢覚助が共に当たったとすれば、仏師と願主の結び付きはまだそれほど確固たるものではなく、また仏師間の競合はまだまだなく、温和な協調路線が続いていたとみられる。

その後三条帝の造像が、長勢にもう一件知られる。尊重護法寺の後三条帝御本尊白檀釈迦如来像である。尊重護法寺は、平親範（一一三六～一二二〇）が、大原来迎院の内に、元暦二年（一一八五）五月二十日に建立した寺で、『尊重護法寺縁起』<sup>27</sup>によれば、当寺の尊像として「一搦手半白檀釈迦如来像一軀」があり、割注で「法眼長勢奉造之」とし、さらに続けて「後三条院御本尊」であったとする。尊重護法寺は親範が、伏見にあった父範家が久寿二年（一一五五）に供養した護法寺を大原に移し、さらに「曩祖入道二品相公」親信（九四六～一〇一七）<sup>28</sup>の発願五大明王像を本尊とする尊重寺を合併した寺であった。恒武平氏高棟王流の親信創建の尊重寺の由緒を継ぐ寺として、代々の縁の尊像が伝来したものであろう。後三条帝発願で法眼長勢の造立とすると、長勢の法眼叙位は延久二年（一〇七〇）で、承暦元年（一〇七七）の法勝寺供養で法印に昇叙する。後三条帝の崩御は延久五年（一〇七三）五月九日なので、結局この像の造像年代は延久二年から五年の間に絞られる。恒武平氏高棟王流の誰かが、後三条帝から尊像を下賜されたものであろうか。<sup>29</sup>いずれにせよ後三条帝の造像に関わった長勢であった。

## 法勝寺の造像

後三条帝親政期から後白河上皇までの院政期を通じて、最大規模の造寺が白河天皇の御願寺法勝寺であろう。また長勢晩年の最大の造仏がこの法勝寺造像であることは、小林剛以来指摘されるところである。延久四年（一〇七二）に即位した白河天皇は、承保二年（一〇七五）六月から白河御願寺の造営を始めた。父後三条帝の円宗寺を踏まえての発願とみられるが、直接的な願意はうかがえない。法勝寺は、承暦元年（一〇七七）十二月十八日に創建した。この日に金堂、講堂、阿弥陀堂、五大堂、法華堂、南大門が供養された。この後永保三年（一一八三）十月一日に九重塔、薬師堂、八角堂が供養され（以上『扶桑略記』）、巨大な寺観が整った。この内長勢が担当したのは阿弥陀堂と塔であった。金堂は覚助と院助、講堂は兼慶（長勢の弟子とみられる）<sup>30</sup>が担当した。

阿弥陀堂は承保三年六月から造営が開始された。十一間四面瓦葺阿弥陀堂に、金色丈六阿弥陀如来像九体、一丈観音勢至菩薩像、六尺彩色四天王像が安置された。「承暦元年法勝寺供養記」「承暦元年十二月法勝寺供養記」「法勝寺金堂造営事」等によれば、阿弥陀堂御仏造立賞として長勢が法印に叙された。

一方金堂の造営に当たったのは覚助であった。七間四面瓦葺の金堂には、金色三丈二尺毘盧舎那如来、金色二丈宝幢、花開敷、無量寿、天鼓雷音如来、彩色九尺天部（梵釈二天）、彩色八尺四天王が安置された。造始は承保二年八月十三日で、承暦元年の八月二十七日に堂に渡されている。約二年間の造像期間である。前出の供養記によれば、造像は覚助が行なったが（「造進」とある）、供養を待たずに同年十月に死去したため、それを院助が引継ぎ完成させたといひ、院助が覚助に代わって造仏賞を受け法橋に叙された。院助は覚助の弟子という。また講堂は七間四

面瓦葺で、金色二丈釈迦と丈六普賢文殊が安置され、造像は仏師兼慶で、講堂造仏賞として法橋に叙された。兼慶は「法勝寺金堂造営事」によれば長勢弟子という。<sup>31</sup> 残る五大堂の仏師は不明である。

結局法勝寺の承暦造像は、金堂が覚助と院助で、講堂・阿弥陀堂が長勢と兼慶であった。堂宇の格として準ずるものの講堂と阿弥陀堂の二堂を得た長勢師弟に対し、中心堂宇である最大規模の金堂を得たことに覚助の優位性がかがえる。しかしこの状況を一変させたのが覚助の早世であった。

続いて塔の造像をみよう。永保三年十月一日に、塔、薬師堂、八角堂が供養された。この内塔の造像を長勢が担当した。<sup>32</sup> 「法勝寺御塔供養呪願文」<sup>33</sup> 「法勝寺金堂御仏」などによれば、塔は八角九重で、内部には金剛界の八尺大日如来四体が四方に分座し、六尺四仏が四角に安置された。金剛界五仏で中尊大日が四体というたいへん珍しい尊像セットであった。

この造像により長勢は賞を蒙り、弟子の円勢に賞を譲り法橋とさせた。八角九重という前代未聞の塔でしかも高さが二十七丈（約八・一m）あったとされており、<sup>34</sup> 白河天皇の権力誇示の象徴となった。そこに安置された尊像も、多分にその八角という平面に拠ったものであるが、金剛界大日が四体も配される特異な構成であった。富島義幸氏は、三重・妙福寺の金剛界大日如来像二体を、その作風や大きさからこの法勝寺御塔の創建時像であった可能性があるとする。<sup>35</sup> 半丈六の金剛界像が二体で、しかも二像はよく似た作風を示しており、二像の一具性は高いと言わざるを得ない。富島氏の仮説はたいへん興味深いが、残念ながら両像の法勝寺につながる伝来は得られない。また創建時像は、承元二年（一二〇八）の雷火で焼失したとみられ、それまでに移動したとも考えがたい。

### 法勝寺新堂（常行堂）の造像

応徳二年（一〇八五）正月日付「法勝寺新堂用途勘文案」<sup>36</sup> は、最初に「注進、造法勝寺新御堂并廊御仏等用途勘文事」とあり、法勝寺新堂御仏用途の雑物のリストである。その中に「御仏五体料」「御仏御衣木料」などとして「長勢支度」の鉄、材木等が載る。長勢がこの法勝寺新堂の造像に当たっていたことは明らかである。御仏が五体でこの時造営中の法勝寺新堂とは、同年八月二十九日に供養される常行堂（『扶桑略記』『百鍊抄』『為房卿記』『水左記』）が考えられる。この常行堂は、法勝寺内に建てられた、白河天皇による中宮賢子追悼の御堂であった。同年九月二十二日に白河帝寵愛の中宮（源）賢子が二十八歳で亡くなった。白河帝の悲しみは深く「主上悲泣数日不召御膳」（『扶桑略記』）であったという。『為房卿記』や『水左記』によれば、白河帝は賢子追悼の御堂を法勝寺内に醍醐寺内に造立することを発願し、法勝寺内の常行堂と醍醐寺内の円光院が同日に供養された。『水左記』には常行堂について「件堂公家奉為故中宮所令造立給也」とあり、賢子追悼は明らかである。『為房卿記』などによれば仏は阿弥陀五仏、等身阿弥陀と三尺観音勢至地藏龍樹であった。<sup>37</sup> この阿弥陀五尊の造像に長勢は当たったとみられる。「長勢支度」として御衣木の材や鉄をあげており、御仏は長勢の造進による造像であったかと推察される。

### 中宮賢子追悼の造像（梶井御願寺円徳院）

中宮賢子を失ったのがよほどの悲しみであったとみえて、白河帝は九月二十四日に、賢子菩提のために毎月二十二日に丈六阿弥陀仏一体を造立供養することを発願した（『扶桑略記』）。『為房卿記』の応徳二年八月二十九日条によれば、この日仏師長勢法印房において丈六阿弥陀仏が



開眼された。この像は「九体中尊」で、来月二十二日を以て供養すべしとあり、賢子追悼の丈六阿弥陀の一であつたとみられる。翌応徳三年（一〇八六）六月十六日に、比叡山東坂下梶井御願寺、円徳院が供養された。白河帝御願で、像は丈六九体金色阿弥陀仏像であつた。これは「故中宮職一周忌間、毎月一体開眼供養丈六仏像也」とあり（以上『扶桑略記』）、長勢房で開眼された丈六阿弥陀はこの九体阿弥陀の中尊とみられる。白河帝による賢子追悼のもう一つの造像にも携わった長勢であつた。なお、像の開眼がなされた長勢法印房は、明らかに長勢の工房である。定朝の工房を覚助が継ぎ、その没後院助が継いだのであろう。それとは別の長勢派の工房がここに確認できる。

#### 四条皇太后寛子の宇治法定院

『長秋記』によれば、長承三年（一一三四）五月十三日、鳥羽上皇は平等院に御幸し、さらに四条皇太后建立の法定院を見た。法定院について「仏長勢作云々」とし、「水石草樹皆優美也」とある。宇治法定院の仏像は長勢作であつたらしい。法定院は、四条皇太后寛子やその弟藤原師実が利用した宇治泉殿と呼ばれる御所付設の御堂で、寛子が建立した。平等院の北西の宇治川沿いであつたらしい。応徳二年（一〇八五）八月二十九日から寛子が宇治泉殿にて五十講を始め、同年十月三十日付「太皇太后宮職仏聖灯油料申請解」<sup>38</sup>には、「充用建立法定院仏聖供灯油料」「法定院建立之後」などとあるので、この頃の創建かとされる。ただ、『水左記』承暦四年（一〇八〇）七月二十七日条に、「件院太皇太后宮御願也」として法定院の名が出てきており、その創建はこの頃を目途とするそれ以前とすべきであろう。その後寛治三年（一一八九）三月二十九日には「宇治法定院内堂」が供養されている（『百鍊抄』<sup>40</sup>）ので、法

定院には複数の御堂があつた可能性がある。いずれにしても長勢は在世中であり、長勢作との伝に一応矛盾はない。安置仏像はいずれも明らかでないが、他の泉殿御堂の事例から推して阿弥陀関係の尊像であつたと想像される。寛子（一〇三六―一一二七）は頼通の娘（母祇子）で後冷泉帝皇后となつたが、結局皇子を得ることなく頼通家の退潮を招いた。この造像は、法成寺の復興と同じく、頼通、寛子と長勢のつながりに基づく造像かとみられる。

四条宮寛子といえ、白川金色院を創建したと伝えられる。金色院の遺品を伝える地藏院には、十二世紀の造像とみられる観音菩薩坐像と阿弥陀如来立像などがあり、いずれもたいへん見事なできばえで注目される。金色院と寛子の関係ははっきりせず寛子創建は疑わしいようだが、その造像は寛子発願の可能性を否定し得ないと思わせるほど優れている。また、その作風は長勢の時期の作として良いかどうか議論の余地があるが、寛子は長命で大治年間まで生きたので、寛子代の造像の可能性は十分にある。同時期の銅造大威徳明王像が伝来するなど、院政期造像史における地藏院諸像は重要で、寛子創建の伝には何らかの根拠があつたのではないかと考えたい。少なくとも平等院を核とする宇治の造像環境の中に入れ込みたい造像である。

長勢は、上記のように藤原頼通や寛子、後三条帝、白河帝などの大規模造像に従事したが、一方で中流貴族の受領層の造像も手がけたことが知られている。これは師定朝にもみられた。以下検証してみよう。

#### 広隆寺造像と藤原資良

長勢の知られている確実な最初の事績が、唯一の遺作である康平七年（一一六四）の広隆寺日光・月光菩薩立像、十二神将立像である（『広隆

寺来由記」、以下『来由記』。『来由記』はこれらを、丹後守藤原資良の「依成願」（願成るに依る）造像で、供養導師は法性寺座主仁暹大僧都とする。藤原資良は正しくは丹波守で、伊賀守にも任じられた受領であった。<sup>42</sup> 魚名流藤原氏の一流で父は保相、康平四年末から伊賀守の任にあり同七年二月頃に丹波守に転じたらしい。伊賀守在任中は康平火災後の興福寺復興造営（先述）のため東大寺領玉瀧黒田両庄を造興福寺夫役とし、<sup>43</sup> 永承三年（一〇四八）の興福寺復興の際にもその名が見え（『造興福寺記』、頼通周辺で活動した中流貴族であった。丹波守在任中には大極殿の造営を請負ったが、任半ばで康平七年七月二十三日以前に亡くなったようである（『水左記』）。また彼は、康平七年には皇后宮権亮であったが、皇后宮は後冷泉帝皇后藤原寛子とみられる。寛子は永承六年（一〇五一）から治暦四年（一〇六八）まで皇后であった。頼通と寛子にかなり近い存在であったものだろう。

供養導師の仁暹（一〇〇〇～六七）は、醍醐源氏長経の子の延暦寺僧で、永承三年の興福寺供養、康平二年の法成寺無量寿院供養、同四年の平等院御塔供養の請僧に名を連ね、同年には法性寺座主となる（以上『定家朝臣記』）など、ほぼ一貫して頼通の周囲にあった。同六年には御持僧（後冷泉帝のか）の勞で権大僧都となり、治暦三年に六十八歳で没している（興福寺本『僧綱補任』）。また康平二年（一〇五九）には、<sup>44</sup> 皇后宮が法成寺に籠った際それに随伴したという。この皇后宮は寛子の可能性が高い。

広隆寺像が作られた康平七年時点で、仁暹は権大僧都で法性寺座主、資良は丹後ではないが丹波守で、ほぼ『来由記』の記事は正しく、これによる限りは、資良が丹波守となった同年二月から没する七月頃までの間に造像時期が限られてくる。「仏工長成法橋」とあるのは、長勢の法

橋叙位は翌治暦元年のことであるので正しくない。ただ『来由記』の記述は、以上の関係人物の検証によって、康平七年の事実として認めることができそうである。仁暹、藤原資良という頼通、寛子の周縁に位置付けられる人脈が浮かび上がる。それを踏まえて、資良の願意について考えてみたい。十一世紀の広隆寺は、薬師如来像の靈驗によって、京中の貴賤の信仰を集めた。長和三年（一〇一四）五月五日、この日天下の貴賤が首を挙げて広隆寺に参った。寅年の五月五日庚寅日に薬師仏が開眼されたからだという（『小右記』『日本紀略』）。その前後に、三条帝や道長を始め多くの貴顕が広隆寺に参籠しており、特に、女一宮（脩子内親王、一条帝皇女）、承香殿女御元子（一条帝女御）など、女性の参籠が多いのが注目される。資良の願意として考えられるのは、やはり頼通や寛子の病氣平癒祈願であろう。この年の閏五月から六月に頼通や寛子の不例が伝えられている（『水左記』）。薬師像に脇侍と眷属を付加するのは、道長が比叡山根本中堂薬師像に十二神将像を作り加えたことや、その後頼通が日光月光像を加えたこと（『山門堂舎記』『叡岳要記』）に通じる。それを踏まえた資良が、その蓄財をもって私願として造像したか、あるいは頼通か寛子の所願像として造進したか、いずれかなのではなからうか。<sup>45</sup>

#### 源親元の醍醐往生院造像

もう一件中流貴族の造像が知られる。『醍醐雜事記』によれば、当寺中院（往生院）本仏半丈六阿弥陀は「仏師長勢」の作であった。他に等身「楽天菩薩」十六体と「板絵像」六体があった。願主は安房守源親元（法名阿法）で、「養君三位殿」（中納言源経成女）のために建立したという。源親元（一〇三八～一一〇五）は『後拾遺往生伝』に載る往生者

であった。それによれば、三十三歳から後三条帝の元で武官の任を勤め、その間浄土信仰者となり、東山に「迎接之堂」「俗称光堂」を建て、阿弥陀三尊とその前に自らの肖像である比丘像（その名は阿法）を置いたという。安房守に任じられたのは嘉保三年（一〇九六）であった。<sup>46</sup>長勢の作とすれば、長勢の没年は先述の通り一〇九一年であるから、それ以前となり、上限は親元が出仕し始めた三十三歳の一〇七〇年以降となるうか。養君三位殿は源経成の娘成子で後三条帝の乳母であったという。年代を特定できないが、三位殿成子の死没を契機とした追悼造像であったかと想像される。おそらく広隆寺の造像と同じ頃の造像ではなかったか。後に受領となる中流貴族の造像であり、長勢はおそらくその初期において、こうした中流受領層の造像に当たっていたものかと想像される。これは、定朝の事績にもみられた。こちらはかなり有力な受領であるが、西院邦恒堂の藤原邦恒、六波羅蜜寺地藏に関わる藤原国挙、日野法界寺の藤原資業である。親元が後三条帝の周辺の人物であることが気にかかる。またこの親元の造像は、醍醐寺が源氏一流の造像の場であったことを示す。

### 弟子たちのこと

後三条帝即位以後、藤原摂関家に対して台頭してきたのが村上源氏であった。永保三年（一〇八三）に左大臣となつて台閣の頂に立った源俊房の日記『水左記』には、俊房の個人的な造像のことが少なからず記されており、源氏も造像の有力な発願主であったことを示している。承暦元年（一〇七七）八月十三日には「法眼長勢二男」の「仏師□」が三尺薬師を、同十九日には「仏師長勢一男」が三尺大威徳を、そして同二十六日には「仏師覚助弟子」が二尺千手をそれぞれ造始している。承暦元

年といえ、まさに法勝寺の金堂講堂阿弥陀堂造像が佳境を迎えていた時期である。その時期に長勢覚助の弟子たちが俊房の造像に当たっていたことが興味深い。

そしてここで注目すべきは、ここに出る三人がそれぞれ誰に該当するかである。長勢の弟子は二人知られている。兼慶と円勢である。兼慶は承暦元年（一〇七七）に法勝寺講堂の造仏賞で法橋位を得た。「長勢弟子」とされる。円勢は永保三年（一〇八三）に法勝寺九重塔造仏賞を長勢より譲られて法橋に叙された。この二人の内円勢は、先述の『養和元年記』に「長勢二男円勢」とあるので、これを信すべきであろう。先に法橋となつた兼慶を「長勢一男」に、円勢を「法眼長勢二男」に当てることが許されよう。「仏師覚助弟子」に当たるのは、院助に可能性があるがどうか。

この俊房の造像は、この頃流行つた疱瘡に罹患した母尊子の病氣平癒<sup>48</sup>に関わる造像とみられるが、一連の造像の中に、長勢や覚助の弟子の他に「法輪小院」なる仏師が丈六像の担当などをしており、源氏との関係が注目される。

### おわりに（仏師長勢の位置）

これまでの検討をまとめておこう。仏師長勢は定朝小仏師として定朝の下で活動し、何らかの功で紀伊講師職を得た。定朝も請け負っていた受領クラスの造像に当たっていたものである。定朝没後の継承期に、予期せぬ法成寺や興福寺の復興造像、あるいは円宗寺という大規模造像が続く中で、多くの仏師が必要とされて、傍系の長勢もその一翼を占めることができたのは幸いであった。正嫡ながら年下の覚助に互して台頭



することができた。覚助とは、年令の差もさりながら、先に法橋に任じられたことによる臆の差が大きかったものと思われる。そしてこの法成寺の復興造像は、長勢のみならず定朝後継仏師たちの作風を決定付けた。定朝遺像の研究とその忠実な復興を課せられた彼らの作風が、定朝様の踏襲となったのは当然の帰結であったといえよう。大規模造像に於ける両者の協調関係は、覚助の死によって大きく状況を変えることになった。覚助の早世は決定的であった。以後覚助後継の院助は低迷し、長勢一流の寡占状態となっていく。定朝最大のパトロンであった道長・頼通の権勢が終焉を迎え、後三条帝から白河帝の時代に移り、摂関家に代わって村上源氏が台頭してくるなど、造像の発願主も大きく様変わりする。長勢は彼らの造像にも対応し、院政期に入って、白河上皇の大規模造像の多くを円派が受注する先鞭を付けることになったのである。白河帝の中宮賢子追悼造像はその意味で重要である。また、本来的には定朝正嫡系の仕事である摂関家周辺の造像にも、寛子の宇治法定院など、関わっていた。覚助没後の長勢の晩年十七年は、まさに長勢一門の時代への足固めの時期であった。次の白河・鳥羽上皇期は長勢二男円勢とその子の長円・賢円の時代となるのである。長勢はその足固めをした。まさに円派仏師の祖というにふさわしい存在であった。

## 注

- 1 安政三年（一八五六）十二月序。『墨水遺稿』三。
- 2 谷信一「円勢法印考―歴世木仏師研究の一節として―」（『美術研究』三〇）一九三四年六月。この論考は、田中豊蔵の「仏師定朝」（『日本文化叢考』所収）、一九三二年九月、『日本美術の研究』所収、二玄社、一九六〇

年十一月。）に啓発されて書かれたもので、本格的な仏師研究の始まりを示す重要論考である。

- 3 小林剛「仏所の分立とその名称について」（『佛教藝術』七）一九五〇年五月、『日本彫刻作家研究』所収、有隣堂、一九七八年五月。
- 4 『鎌倉彫刻図録』奈良帝室博物館、一九三三年十一月。
- 5 ここでの「院流」は全体の用例から推して「院派」の誤とみられる。
- 6 小林剛「鎌倉時代彫刻史概説」、金森遵「鎌倉時代の仏師組織に就いて」。
- 7 小林剛「仏師法印長勢」（『國華』七一七）一九五一年十二月、『日本彫刻作家研究』（前掲論考（注3））所収。
- 8 多くの蓄積があるが、次の論考が重要である。作品研究では、京都国立博物館編『院政期の仏像』岩波書店、一九九二年三月。仏師研究では、根立研介『日本中世の仏師と社会』塙書房、二〇〇六年五月。本論考は、一々出典を示さないが、この二編に拠るところが多いことを、あらかじめお断りしておきたい。
- 9 『群書類従』二四釈家部所収。（一）内は割書。
- 10 『二中歴』は長勢の割注で「清水寺別当法印定朝弟子」とする。この記述で気になるのは、長勢が清水寺別当であったとすることである。清水寺別当には定朝、円勢、そして長円がそれに就いたことが確認できる。真偽は不明だが、長勢もなっていたとすれば、円派の系譜に連なる職として注目すべきである。清水寺と興福寺の関係などが問題となってくるが、本稿では十分に検討できなかった。今後の検討に期したい。
- 11 伊東史朗「院政期仏像彫刻史序説」（『院政期の仏像』所収）岩波書店、一九九二年三月。
- 12 男行近、式左男の意味が不明である。これも仏師名なのか。
- 13 頼成は具平親王の子で（村上源氏師房の弟になる）、はじめは源姓を名乗ったが、藤原伊祐の養子となり（『尊卑分脈』）、四条宮寛子立后の際、

母の頼通妻祇子の父とされた（『栄花物語』根あわせ）。頼通の側近であつたとみられる。

14 「養和元年記（抄）」（『奈良六大寺大観 興福寺二』「史料」所収）岩波書店、一九七〇年十二月。お茶の水図書館蔵本の翻刻である。

15 西川新次「宮廷仏師とその周辺」（『院政期の仏像』前掲論考〔注11〕所収）。

16 武笠朗「経円」（「仏師と仏像を訪ねて」七）（『本郷』一四〇）吉川弘文館、二〇一九年三月。

17 根立研介氏は、彫刻に於ける和様成立の舞台となった、定朝の造仏の場としての法成寺の意義について論じている。

根立研介「造仏の場としての法成寺の意義」（菱田哲郎・吉川真司編『古代寺院史の研究』所収）思文閣出版、二〇一九年八月。

18 武笠朗「院政期中央造像の様式展開」（実践女子大学文学部『紀要』六〇）二〇一八年三月。

19 『三僧記類聚』所収「法勝寺金堂御仏」は、その翻刻が次の論考に載る。富島義幸「法成寺金堂・法勝寺金堂の安置仏について」（『日本宗教文化史研究』二二）二〇〇七年十一月。

20 あるいは、無量寿院創建時の康尚と定朝のように、覚助が関わった可能性も考えられる。

21 前掲小林論考（註7）。

22 この四人の中に、広隆寺造像の供養導師仁暹が含まれる。仁暹については後述する。

23 定朝の造像の主要な場が三つあり、それを後継三派仏師が継承したと論じたことがある。道長の摂関家造像、興福寺造像、公家の造像で、この内最も重要な摂関家造像を、正嫡の仕事として覚助から院助の院派が継承した。その中心が法成寺造像に他ならない。このことは後に院覚が「寺法

橋」（『中右記』長承元年（一一三二）二月二十八日法成寺塔供養日条）と呼べたことにも及んでいく。

武笠朗「康尚・定朝とその後の正系仏師」（『日本美術館』所収）小学館、一九九七年十一月。

24 武笠朗「院範」（「仏像と仏師を訪ねて」八）（『本郷』一四一）吉川弘文館、二〇一九年五月。

25 はじめは円明寺で、翌三年六月三日に改名したという（『百鍊抄』）。

26 造始のことは『為房卿記』康和二年七月二十五日条による。

27 『伏見宮家旧蔵諸寺縁起集』（『図書寮叢刊』）所収。奥付に元暦二年五月二十日とある。これが供養日で、この時の成立か。

28 護法寺本尊毘沙門天像は法眼院朝の作であり、尊重護法寺供養の際、諸像の修理に法橋院尚が当たっている。院派仏師の仕事場であつたらしい。

29 後三条帝の頃には『定家朝臣記』（『康平記』）の記主平定家がいるが、頼通家家司の定家に、頼通と対立していた後三条帝との関係を想定するのはむずかしい。可能性のあるのは、春宮時代の後三条帝の後見の藤原能信に近かった範国と、春宮亮にあったその子経方、経章あたりであろうか。

30 いずれも『諸寺供養類記』所収、『校刊美術史料』中所収。「承暦元年法勝寺供養記」は『続群書類従』にも載る。

31 同記には「恵慶」と出るが、他史料から兼慶の誤とみられる。

32 薬師堂（丈六七仏薬師、日光月光）、八角堂（三尺愛染王）の造像が誰によってなされたか知られない。

33 「法勝寺御塔供養呪願文」は『朝野群載』所収、「法勝寺金堂御仏」は『三僧記類聚』所収（前掲注19）。

34 高さ二十七丈は暦応三年（一一三〇）二月「院家雑々跡文」（『大日本史料』所載）に出る。建保元年（一一二三）再建塔の大きさである。

35 富島義幸「妙福寺の二体の金剛界大日如来像について」（『日本宗教文化

史研究』二六）二〇〇九年十一月。

36 『楓軒文書纂』八三所収、『平安遺文』一二二八文書。

37 同記によれば、その尊像構成は法成寺常行堂のそれと同じで、円宗寺の場合は龍樹の代わりに弥勒が置かれたとする。

38 『朝野群載』巻第四所収。

39 藤本孝一「宇治白川の金色院創建について―四条宮寛子の御所宇治泉殿考―」（『中世史科学叢論』所収）思文閣出版、二〇〇九年。

40 『中右記』『後二条師通記』はともに「宇治御堂」とする。

41 前掲藤本論考（注39）。

42 長久二年（一〇四二）には越後守であつたらしい（『春記』）。

43 康平七年二月十六日付「散位藤原信良解案」、同年四月二十三日付「官宣旨案」。いずれも『東大寺文書』、『平安遺文』九九一、九九二文書。

44 あるいは法性寺か。興福寺本『僧綱補任』康平二年の法橋経寿の項には「法成寺」と出るが、「寺家別当仁暹」と出るので、彼が座主に就いた法性寺の可能性が高いか。仁暹はこの際の賞を弟子経寿に譲り、経寿が法橋となった。

45 広隆寺像をめぐる人物については、その概要をすでに別稿で示している。

武笠朗「長勢作十二神将立像」（『週刊朝日百科日本の国宝〇一五京都広隆寺』所収）朝日新聞社、一九九七年六月。

46 親元は、赴任先の安房でも阿弥陀堂を建て丈六阿弥陀を安置し、民に念仏を勧めたという（『往生伝』）。千葉県館山市に親元を祭神とする国司神社がある。

47 源成子は一〇四六年から一〇六八年までの動向が知られる。その直後に没したものであろうか。

48 師房妻、藤原道長女。